

# 文明崩壊\*

— 滅亡と存続を分けるもの — 中村 敏郎

本書は、現代社会が抱える課題を、文献・現地調査をもとに筆者の豊富な知識と深い洞察力から考察することにより、過去において崩壊した文明と同様の生態系自死（エコサイド）の道を辿る可能性に警鐘を鳴らしている。著者は崩壊の潜在的要因として、環境被害、気候変動、近隣の敵対集団、友好的な取引相手、環境問題に対する社会の対応という5つの課題を設定し、5つ目の課題として

いる社会の対応はどの社会にも共通に重要な要素としている。

まず、第1部は、アメリカのモンタナ州の環境の現状から始まる。自然環境に恵まれた美しい地域であっても5つの課題全てを抱えていることを示している。

第2部は、過去の社会において、栄えていた文明がその後、消滅に至った5つの実例を考察する。イースター島で環境が復元不能となるまでモアイ像が競って作られたこと、南東ポリネシアのピトケアン諸島とヘンダーソン諸島、アメリカ南西部の先住民のアナサジ族、マヤ、グリーンランドのノルウェー人入植地などそれぞれにおける発生から衰退あるいは消滅に至るまでの過程について複雑な要因を考古学の手法を用いて緻密に解明・裏づけしながら詳細に描かれ、当時の人々の様子を思い浮かべせる。脆弱な環境の下、辺境の社会で適応不能に陥り食糧難から最悪の結末に至る悲劇であった。また逆に、過去から存続してきた社会を挙げている。ニューギニア高地における数万年前からの自立的生活の

なかで営まれてきた現地の条件に適した先進的な持続的農業や人口増加の制限の取組、あるいは総面積5,000km<sup>2</sup>足らずの孤島であるソロモン諸島でエコピア島において3千年前の入植から維持されてきた持続性の取組、そして江戸時代の徳川幕府による森林保全を挙げている。

第3部は、現代社会の環境問題として4地域を挙げている。ひとつ目は政府により扇動された民族対立により発生したルワンダの大量虐殺の要因は複雑であるが、その1つとして人口圧力があつたこと。次にカリブ海の島を東西に二分するドミニカ共和国とハイチの相違を見る。歴史的には宗主国（スペインとフランス）の事情による影響が大きく、近年、ドミニカの環境（特に森林）保全を進めた元首の独裁的手法を紹介し、密接な関係にある両国の将来の最大の課題は協力関係の構築如何とする。中国は、経済成長とともに環境被害も拡大し、中国の動向は世界規模での影響を持つ。オーストラリアは低い生産性の土壌と不安定な降雨により農業は脆弱でありイギリス本国を

模して持ち込んだ羊は環境に適しておらず、また、うさぎによる多大な被害を被っている等を挙げている。

第4部は、将来に向けて過去から現在の破滅の要因分析を総合的に行う。大企業と環境との関係について、企業による環境破壊は利益追求の観点からであり、環境を保全するためコストが必要であっても消費者が選好するのであれば、収益が上がる仕組み作りを取り組むのも企業であるなど筆者の企業での活動経験に基づき具体的に例示している。大企業との積極的な関わりなくして世界の環境問題の解決は不可能とする筆者の現実主義的な意見である。最後に資源問題、有害物質、人口問題等の深刻な12の環境問題を挙げ、悲観ではなく、将来への希望（筆者は自らを慎重な楽天主義者としている）を示して終わる。

第2部、3部は歴史や地理の読み物としても面白く、第4部では筆者はヒントを示しながら環境保全への取り組みを讀者に考えさせている。グローバル化した社会では環境問題もグローバルな取組なしには解決不可能である。

\*ジャレド・ダイアモンド『文明崩壊―滅亡と存続の命運を分けるもの―』草思社、(2005)

